

# 六十一年のロマン

石田幹夫

昭和34年は名古屋にとつて、まさに悲喜こもごもの年であった。昭和20年5月、先の大戦による大空襲によって焼失した名古屋城が昔のままの姿で復興し、天守閣には鯨が金色に輝いた。

しかし、この年の9月26日、名古屋地方を襲った伊勢湾台風は風速50メートルを超え、まさに未曾有の大惨事の惹起となった。当時「鯨が水を呼んだ」と評した人もいた。

## 名古屋城の再建

名古屋城は、関が原の合戦後江戸幕府を開いた徳川家康が、慶長14年東海道の要所として福島正則ら諸大名20名に命じて築城させたわが国の代表的な平城である。

昭和20年5月の名古屋大空襲によって、大・小天守閣、本丸御殿をはじめ建物のほとんど大部分が焼失した。

名古屋甚句で「尾張大納言さんの金の鯨ほこの言うこと聞けば」と唄われる金の鯨も国宝として保存されてきた天守閣、本丸御殿とともに無残にも焼失し溶解してしまっ

た。この金の鯨は、天守閣再建に際して、すべて18金、雄の鱗は112枚、雌の鱗は126枚で天守閣を飾り、今は3月、青く澄んだ春の空に燦然と輝いている。

## 伊勢湾台風襲来

名古屋城が再建された昭和34年の9月26日、風速50メートルを伴う超大

型台風が名古屋を中心として東海地方を直撃した。後にこの台風は、伊勢湾台風と名付けられた。名古屋協会は主として名古屋地域の北部が管轄であったので、名古屋南協会

方不明者1名、従業員家族の死亡者195名、行方不明者3名、また50%以上の工場・建物の損壊37件、一時操業不能68件、その対策労働者2、115名



昭和34年再建された名古屋城

と被害は予想をはるかに超える甚大なものであった。

名古屋北労働基準監督署（以下「名古屋甚署」という）では、早々と9月30日付けで管内事業場に対し

安全作業のため、感電、墜落、飛来落下などによる危害防止対策

職場衛生のため、消毒、飲料水、食物などに関する適正な衛生管理対策

などの応急対策の要望書を発送したが、この作業には名古屋北労働基準協会事務局も全面的に協力した。

特に名古屋甚署では、災害補償費等の請求書の提出者に対する緊急措置

なども講じられた。名古屋協会で、会員事業場における従業員の死亡者、それとほぼ全壊の会員事業場に対し弔慰ならびにお見舞いを決定、役員及び事務局職員が個々に訪問して見舞った。

伊勢湾台風は、協会60年の歴史のなかでも極めて特異な出来事として印象に残るものであるが、伊勢湾台風襲来の時期が戦後の荒廃から日本経済が不死鳥のごとく、また文字通り驚異的に経済発展への道を進む怒涛期であったことが、伊勢湾台風襲来という大惨事の中で、のせても救いであった。（名古屋北労働基準協会副会長）